THE YONEYAMA UMEKICHI MEMORIAL HALL REPORT

米山梅吉記念館 館報

2013
（平成25年）
春
Vol. 21

静岡育英会が明治18年7月組織された。明治維新によって、徳川家は駿河の地に移住させられ、幕臣が大挙して駿河の地に移り住んだ。これらはそれまで日本の中枢にあった俊英ともいえる人達であった。やがて、これら幕臣は新政府に召し上げられたり、自ら出仕を望んで中央に出ていった。また、中央で新たな働き場を求める者もあった。しかし、そのようなことを潔しとせず、駿河の地に残る者もあった。このような状況下、中央に出て行った人を中心に、静岡に残っている幕臣の子弟の育英の必要がいわれ、組織されたのが静岡育英会である。

当初会長は赤松則良であったが、すぐに榎本武揚となり、亡くなるまでつとめた。また、大正6年には規則が改められ、育英の対象者を旧幕臣の子弟から、一般静岡県人や旧幕府に縁故のある者の子弟に広げられた。組織も総裁、名誉会員、顧問が置かれるようになり、大正11年8月には財団法人となった。米山梅吉がいつから静岡育英会にかかわったか明確でないが、大正10年9月では、評議員となっている。

この写真（沼津市明治史料館所蔵）は、大正12年6月17日、沼津で静岡育英会の事業としての講演会があり、その翌日、沼津駅前城岡神社（この地に沼津兵学校があった）に詣でたときのものである。この講演会で、米山は3人の講演者の1人として講演している。

写真左から徳川家達令嬢、徳川家達（静岡育英会総裁、当時貴族院議長）、井口省吾（同顧問、沼津市出身、沼津兵学校付属小学校在籍、陸軍大学校長などを歴任、陸軍大将）、平山成信（同会長、幕臣の子、貴族院議員や枢密顧問官歴任）、笠井信一（同副会長、富士市出身、内務官僚、貴族院議員歴任）、米山（同理事）、河井弥八（同理事、掛川市出身、当時貴族院書記官長、昭和天皇侍従次長、貴族院議員や戦後参議院議長歴任）、右端は山口勝（同理事、幕臣の子、沼津兵学校付属小学校在籍、陸軍中将）

公益財団法人 米山梅吉記念館

館報第21号発行に際して

理事長　渡 邉 脩 助

全国ロータリアンの皆様、極寒と豪雪の冬でしたが、お変わりありませんか。米山梅吉記念館です。記念館へのご理解、ご協力に感謝申し上げます。記念館屋上からの富士山は、山頂からすそ野まで白雪を頂いており、その雄姿はただ感嘆するばかりです。

我が国のシンボルとして聳え立つ「富士山」は、第2620地区（静岡・山梨）にとっては、宝の山でもあります。両県は1998年に「富士山憲章」を制定し、２月23日を「富士山の日」とする条例を制定しました。

「ロータリー最初の例会が開かれた日」が「富士山の日」と一致していることは、当地区ロータリアンにとって、忘れることはできません。その富士山は今「世界文化遺産」として登録申請され、その可否が今年の６月に出ることとなっております。是非登録をされますことを願っております。

平成23年３月11日の東日本大震災と福島第一原発事故という未曽有の災害がありました。あれから２年が過ぎようとしています。いまだに多くの被災者が仮設住宅での暮らしを余儀なくされ、あるいは故郷に帰ることができず、他県での生活を強いられております。原発事故の処理は、いつまで続くか定かではありません。

「ロータリーの友」２月号の「チェルノブイリ原発事故のその後と福島」の記事にあるように、「終わりのない除染作業」、「次の世代にも及ぶ影響」、「26年たっても終わらない現実」をみても原子力政策の有り様、新エネルギー政策に関しても、熟慮しなければなりません。

去る2月９,10,11日の３日間、当第2620地区の米山奨学生、学友会とロータリアン17名で、第2520地区、岩手県山田町の御蔵山「鎮魂と希望の鐘」の広場へ、伊豆の河津桜を復興祈念植樹に行って参りました。河津桜は早咲きでピンク色をした綺麗な桜です。慰霊と復興を祈念する3月11日には、きっと蕾が開き始め、明るさと元気を与えてくれることでしょう。米山奨学生にとっても、あの被災地視察研修は大変有意義な時間であったと思います。

次年度RI会長ロン・バートン氏のテーマは、「ENGAGE ROTARY CHANGE LIVES」日本語訳「ロータリーを実践し、みんなに豊かな人生を」です。

「今日、ロータリーで目にすることの多くは、昔と違います。しかし、ロータリーの土台は変わっていません。私たちの土台はこれまでと同じように、ロータリーの中核的価値観、すなわち奉仕、親睦、多様性、高潔性、リーダーシップです。これらの価値観こそが、ロータリアンとして私たちを定義づけるものです。」と述べています。

次年度最大の環境変化は変革の年であり、財団のプログラムが「未来の夢計画（Future Vision）」に移行する年度です。

地区やクラブに自分たちの財団であるという意識を高めてもらうこと、財団のプログラムを推進することにより、ロータリーの公共イメージを向上させるための、新たな方法が「未来の夢計画」です。

平成10年に建設された新館が築15年になりました。昨年は台風による雨漏りや、側壁の破損などがありましたが、館内の展示などの改革は何らされておりません。せめて展示品の整備、入れ替えなどの検討をしたいと考えております。

記念館の運営は、すべて全国ロータリアンの善意のご寄附で成り立っていますが、まだまだ厳しい状況です。基本的な資金の外、賛助会員、全国への年間１人百円募金運動、周年行事ご寄附等に頼らざるを得ないのが現況です。

厳しい冬が終わり、館の春は近いです。館の梅は今満開となっておりますので、皆様のご来館をお待ちしております。

秋季例祭

■日時　2012年９月15日(土)
■会場　(財)米山梅吉記念館ホール

- 例祭及び墓参
- 例祭式典
- 記念講演
  演題　「私の登った外国の山々」
  講　師　渡辺玉枝 氏
  （アルピニスト）
- アトラクション
  ひとり語り
  語り手　大塚良重 氏
  （女優）
- 懇 親 会

大塚良重氏

記念講演

私の登った外国の山々

渡 辺 玉 枝（アルピニスト）

2012年５月、エベレスト世界女性最年長登頂記録更新

私は、小学校入学が終戦の年で、小さい時からいつも富士山を見て育ちました。当時は、ちょっとお金持ちのご子弟とかが山に登り、私達はとても山登りなんてできる家庭ではなかったのです。ですから山は部外のことだと思っていましたが、勤め始めて自分で自分のお金が使えるようになり、初めて友達から聞いた山登りの話に惹かれて、山にのめり込みはじめました。その時その時の転機があったのですが、今考えるといい友達に恵まれて、いい山を登れたなあと思います。

今回講演に先立ち、今までどんな山にどのくらい登ったかと数え上げてみたら、22回目になります。お金がかかるのは8000㍍以上の山です。それ以外の山は期間もそれほどかかりませんし、山によっては簡単に登れる山もありますので、22回で相当大金使ったかと思うとそうでもありません。8000㍍以上、特にエベレストとなりますと、大体登山期間２ヶ月以上、今年のエベレスト、チベット側から登ったのでチョモランマですが、３月27日に出発して６月２日に帰ってきました。こうなるとちょっと桁が違ってお金がかかってきます。私達はガイドを雇って行く

わけではなく、ガイドの代わりに荷物を上げてくれるシェルパさんを雇いました。普通の人が公募隊で行く２分の１弱ではないかと思います。

今回なぜ決心したかというと、以前一度行っているのでどのくらい大変かという予測ができたので、無理かなとは思いましたが、急遽、年齢がもう一つ重ならないうちにと決行しました。一緒に行った相手も良かったと思います。その人、村口カメラマンとは、8000㍍級に６回登っています。高い山というのは、長い期間一緒に生活します。長い期間ですので、それぞれ独立したテントを持っています。調理だけコックさんをお願いして、食事はみんな集まって一緒に食べます。今回、コックさんと助手の方はチベット人でした。メンバーはハンガリー人２人、ノルウェー人５人、日本人２人の９人の隊でした。朝食は日本人が欲するような献立を考えてくれて、外国人にもボリュームのある肉類も頻繁に出て来ました。外国人が上に登っているときにはモーニングティーを持ってきてくれ、彼らはとても親しく交わってくれたので、私達も楽しめました。

エベレストは8848㍍あります。事前にある程度高所順応、体を5000㍍から5000㍍ちょっと越した位は、平気で生活できる体を作っておかなければなりません。日本では、一番高い富士山でも3800㍍欠けます。ですから、外国に行ってから体を順応させなければなりません。今年は３月のうちにネパールに入り、ネパールで一週間位5000㍍くらいは平気な体にトレッキングしながら順応しました。いくら元気で丈夫でも、高度順化という作業だけは省略できません。ネパール側は、一週間以上かけてベースキャンプに入ります。全部徒歩です。飛行場から上に自動車道路は一本もありません。すべての重い物も人間が背中にのせるか、動物の背中に乗せます。チベット側は5200㍍くらいのベースキャンプに車で行くのです。うっかりすると、そこから体がもちません。山は表側裏側、東側西側、チベット側とネパール側では、すごい環境の変化です。ネパール側はベースキャンプが氷河の中にあります。一歩出ると氷の上です。氷の中はクレバスが走っています。いきなりアイゼンつけてはしごを渡っていかなければなりません。壁になっているところは、はしごを登っていきます。チベットでは6300㍍まで運動靴で歩けます。同じ山でもこんなに違うのかとびっくりしました。

私達が登ったのはこちらの稜線のルートです。最終キャンプから、前日夜の９時に登り始めて、10時間登りました。ルートを見ると、10時間でよく登れたなあと思います。

エベレストというのは、海底から隆起した山です。頂上にイエローバントというのがありますが、海底から出て来たので、イエローバントには貝殻の化石が時々見つかります。私達のベースキャンプは、氷河が運んできた石のゴロゴロしたものをならして作ったところで、サッカー場10面以上ある広大なベースキャンプです。ここから行ったり来たりを繰り返し、ＡＢＣ（アドバンスベースキャンプ）に登り体を慣らします。富士山に登るとしたら、河口湖富士吉田側から頂上まで登っても1500㍍くらい。それくらいを一日に順化するような感じで区切って登り、体も足も慣れてきます。ここから1100～1200㍍登ると、拠点になるＡＢＣに着きます。

私達はエベレストに、風にのって雪が舞っているのを見て登頂時期を判断します。大体５月10日過ぎると、だんだん雪が舞わなくなります。それが登山シーズンが安定期に入った合図です。安定期もそんなに長くなく、せいぜい一回目が三日続くかどうかです。その次は間が空いてさらに二日か三日、５月のシーズンで頂上まで行ける日が五日あるかないかです。そういうときに登頂者が殺到しますので、今年私達が登った５月19日は、ニュースによると200人くらいは登ったのではないかという話でした。最近は団体で来ています。

これがベース風景です。この小さいテントがトイレテントです。トイレは別に作ってあります。一人ひとりが個別のテントに入っています。コックさんは私達が上にいてしばらくして降りてくると、一人10リットルくらいのお湯を沸かして、髪や体を洗うサービスをしてくれました。山を歩いていて髪や体を洗うのは、すごく気持ちがいいものです。コックさんは色々気を遣ってくれました。

これが頂上です。頂上はこの辺はもう斜面です。

幅は１㍍あるかないかです。ここに布きれがあり、これがポールです。ポールは１㍍ちょっと高いくらいですが、ポールに巻き付けてあるのが絹の布で、２㍍くらいあります。その布が巻き付いて、去年の旗、一昨年の旗というふうにどんどん重なっています。これが、毎年どのくらい人が登ったかのバロメーターになっています。

10年前に登った時は、頂上で周りの山を見たり、写真を撮ったり、40分位粘りました。今回は風が強く人も多かったので15分位で交代しました。

今年は頂上があまりにも混雑していたので、そこから見える他の山を独占して楽しめることができなかったのですが、こういうところに国境の山があって、インドとネパールの国境のカンチェンジュンガ、私たちの脇にローチェとか、左にマカルーとか有名な山が見えて、やっぱりエベレストは高い、というのがよくわかります。

エベレストも、最近はかなり登山人口が増えてきました。今年私達のチベットの中間キャンプを通った若い男の子を見たら、高校生くらいの韓国人でした。多分韓国や中国は若い人を率先して登らせるようなお金持ちがいるのか、若い人を登らせようという団体か、篤志家でもいるのではと想像しました。色々な国の人達がそれぞれの方法できていました。

これは頂上へ行くルート上のロープです。雪原を登ってきてこのロープのところを登っていくのですが、着いたもの順に適当なところへテントをはります。私達のシェルパさんは、私なんかでは歯がたたないような硬いところにテントをはってくれました。入るときも出るときも相当気をつけないと、そのまま滑ったら一気に1000㍍降下ではすまないくらい下までいくので、かなり神経を使うところです。今年私達が登った日が多分一番お天気がよかったと思います。ここは雪のたっぷり積もった稜線があります。雪の原っぱに見えますが、下はこちこちの氷です。ですからアイゼンをしっかり効かせないと滑って危

険です。ここを約２㎞行くとベースキャンプに近いＡＢＣに着きます。

ネパールのシェルパさんはとても信心深いです。登る前には必ず石垣を積んで祭壇をつくります。そこに御神酒やものをあげて、そこでお祈りして厄除けしてから登ります。毎年積み替えるのですが、石細工の職人もいて、石垣もきれいに作っています。私もネパール人にならって祭壇にお祈りをして上に登り、降りてきたときも報告をしました。

これが私達のサーバーです。私は知らなかったのですが、この人が頂上で衛星電話を使い連絡したようです。私は、73歳はそんなにニュースになるとも思っていなかったので、後で驚きました。山から下りて7300㍍のキャンプへ行く途中で、行き会う人がみんな「Congratulations」とにこにこして言ってくれるのです。なぜ「おめでとう」なんだろう、と思ったらみんな知っているのです。こういうことは個人差がすごくあります。登頂したことをみんなに知らせて喜んでもらいたい人と、私達のように個人的に登ったのだから、こっそり登ってこっそり帰って静かにしているのが好きな人です。前回は、その人がＰＣで画像を送ったりするので「余計なことをするな」と怒りました。今回はその前にニュースが流れてしまい、どうにもなりませんでした。カトマンズに帰ってきたら早速記者会見もあって、40社くらいきました。

今回のエベレスト登頂は、後になって大騒ぎになってしまいました。兄弟に日本を発つ前の日に、「どこに行くのか」と聞かれたので「今回もエベレストだよ」と。帰ってきて兄に、「どういうルートかも聞いていなくて、新聞社にインタビューされたけれど答えられなくて困った」といわれました。事前に詳しいことを報告するほどのこともないと、一応日程計画書だけはおいていったのですが。同じ日程で行っていても最終的に登れるかどうかは天候次第、体調次第です。今まで海外遠征22回ですが、すべて頂上

に立っています。かなり運がいいなあと感謝しています。天気は個人ではどうにもできないことだし、天気を見て登頂するのも、なかなか読み切れるものではないと思います。

これまで色々な山に登ってきましたが、私の海外の山の基本になったのは、1977年マッキンリー南壁アメリカン大ルートで、私より一回りくらい若い男性達に誘われて行きました。氷の壁を登るのも岩を登るのも、すべて基本になっているのがマッキンリー登山ではなかったかと思います。当時の仲間に感謝しなければいけないと思います。かなり腕の良いクライミングに長けた人達でした。しかし登山後、こんな危険な山はやめる、とみんなベースキャンプで道具をどんどん火にくべてゴミの中で燃やしていたのです。それから実際に行っていないのです。そのまま続けているのは私だけになってしまいました。

山登りの楽しさは、そこまで行く行程と、本当はみんなで色々な意見を出し合って日程や行程を決めることです。

講演終了後、参加者との質疑応答がありました。

Q　一緒にいかれる村口さんによると、とにかく玉枝さんは強いと書いてありました。その辺の自覚は？

A　今回感じたのは、トレーニング不足だなあ、ということです。しっかりトレーニングしていればもう少し楽に行けたのではと思います。やはり年をとりました。

Q　日常のトレーニングはどのように行っていますか？

A　家の周りで機械を使わずに畑仕事を行っています。自宅から歩いて行ける御坂山に登り、タイム測定で体力の状況を把握しています。若い人が登る力をつけるには、北アルプスの縦走よりも、アップダウンのある南アルプスの縦走のほうがよいでしょう。

Q　死を意識したことがありますか？

A　今まで海外遠征22回、すべての山の頂上に立てました。死を意識したことも、死が近づいたこともなかったことは、幸運であったと思います。死か生か紙一重のようなところを動物的感覚で感知し、危険を感じたら止める。もう少しがんばればできると自信がもてるようならば、挑戦することも必要だと思います。

「ひとり語り」　語り手　大塚良重（女優）

本を持たず原作の言葉を暗記したまま、一人で文章を語ることを「ひとり語り」と名づけました。特定の映像化がなされていないからこそ、自らの頭の中で、如何様にも自由に想像の翼を広げることができます。その楽しさを大人の方に再認識していただくお手伝いができたら、と数年ほど前から始めた活動が「ひとり語り」です。自分が魅力的だと思うものは、他者にも熱意をもって勧めることができるのではと思ったのです。

一期一会の舞台ゆえ、いつもドキドキしながら語ります。「ひとり語り」とはいいながら、舞台を創るのは私だけではできません。お聞き下さる方々の想像力が、私の語りの重要な仕上げをなさって下さいます。お客様と作家と私のコラボレーションの世界です。まだ、様々な作品を模索中ですが、いつか梅吉翁のお話を語れたら、と夢はひろがります。私は、言葉に携わる者として、言葉の持つ力、言霊を信じております。

また、おめもじする日を楽しみにしております。

米山梅吉記念館と千歳セントラルロータリークラブ

高塚信和（千歳セントラルＲＣ　初代会長）

千歳セントラルロータリークラブは、1991年11月に産声を上げ誕生致しました。

そして翌年10月に創立１周年を迎え、米山月間を迎えるに当たり、日本のロータリーの父と呼ばれている米山梅吉翁を知る機会に恵まれました。クラブとして米山月間には、何をすべきか思案中の処、たまたま一人の会員が、テレビで放映された「米山梅吉物語」の録画を持っておりましたので、早速全員で鑑賞した処、多くの会員の顔色が変わり、米山翁に付いてもっと知るべしとの声が多数で、まず米山梅吉記念館を訪問する運びとなりました。

14名の会員で、初めて米山梅吉記念館、米山家墓所を訪問してから、早や22年の月日が経過しましたが、当初訪問に当っては長泉ロータリークラブの米山晴雄氏（故人）、石垣恭弘氏他会員の皆様にお世話になりました。記念館での研鑽、そして米山翁の墓所では墓前に手向けた線香の煙の中に、深い感銘を受けた事を覚えております。

以来毎年10月には、記念館訪問と墓所参拝を恒例行事としております。私が最初に訪問した時のメモに依りますと、入口傍にある石碑に刻まれた翁の俳句「いさかひもなき漫々の青田かな」は、この地域の当時の状況を詠んだものと思われ、更に今は、漫々の水をたたえ、青田が成長し、辺り一面黄金色の稲穂が頭を垂れている光景に深い感銘を覚えた。と記されておりました。

当時の六角形の記念館に入りますと、狭く、文献の整理の不備、汚損、破損等が進み、米山翁を顕彰する記念館にしては、あまりにもお粗末すぎるのではないかと痛切に感じました。しかし心ある人達は、既に新記念館の建設に動き始めている事を知りました。

訪問回数を重ね、1994年９月に行われた記念館開館25周年式典には、20名の会員で出席し、懇親会では「東遊吟情」を唄ったのも懐かしい思い出の一頁を飾っております。

席上当クラブとして、記念館建設に100万円の寄付を行い、建設に向けての先鞭をつけたと自負しております。

新記念館完成時には、玄関東側に梅吉翁にちなんで、梅の木の植樹を行いました。長泉クラブの石垣様始め皆さんのお世話に依り、毎年たくさんの実を付け、それが梅酒となり当クラブの秋の夜長の例会を楽しませてくれております。

米山梅吉記念館は、昭和44年に開館以来、近隣クラブの協力、更に全国のロータリアンの支援で維持管理されているとも聞き及んでおります。遠く北海道の地にあります当クラブも、記念館地元の長泉ロータリークラブとの15年に及ぶ友好締結により米山梅吉記念館は、非常に身近なものと受け止めております。

記念館は、ポールハリス来日記念の月桂樹、ビチャイ・ラタクル元国際ロータリー会長来館記念の金木犀があり、またはなみずき等多くの木々に囲まれ、緑豊かな雰囲気の中にあります。日本のロータリークラブ、ロータリアンのメッカとして、北海道から沖縄に至るまで、多くの人々に愛され、末長く存続する事を切に願っております。

米山さんと国民健康保険

三井報恩会の寄付により全国12組合で制度創設の実験

谷 内 宏 文　（川口ＲＣ）

はじめに

本稿では、米山さん（以下、敬愛の念を込めて「米山さん」と呼ばせていただく）が、「財団法人三井報恩会」の理事長としてなされた厖大な公益活動の中から特に的を絞って、現在の国民健康保険制度制定時に寄与された支援実績について書いて見たいと思います。

米山さんは、昭和９年から亡くなられる前年の昭和20年までの約10年間を、財団法人三井報恩会の理事長として、この公益財団の運営を主宰しました。そこで行った社会福祉・学術助成・農漁村支援等の諸事績は、その質と量においてこの種の財団等の機関が行ったものとして文字通り「空前絶後の内容」であると言って決して過言でありません。

米山さんとこの三井報恩会については、坂本豊美元当館理事長が編纂された『米山梅吉先生語録抄』の73頁以下に簡にして要を得た文章がありますので是非参照いただきたいのですが、その一部を少し長くなりますが借用すると次の通りです。

『米山梅吉先生語録抄』坂本豊美 編

「昭和２年の金融恐慌で多くの銀行が倒産、ついで昭和５年からは昭和恐慌に突入、さらに冷害・凶作が追い打ちをかけ、農村は極度に疲弊し娘の身売りが社会問題となった時代である。そうした暗い時代のなかで「多くの国民が苦しんでいるのに財閥は利益を独占している」と人々の目には映り、なかでも最大の財閥三井への反感が高まった。そうした憤懣が、昭和７年３月５日三井合名理事長團琢磨氏の暗殺という形で噴出した。この暗殺事件は、三井財閥の幹部であった米山梅吉氏にも大きな変化をもたらした。米山梅吉は同年３月15日に三井合名会社の集団指導体制の一画に加わることとなった。この暗殺事件を契機に三井財閥は社会的批判を沈静化するために一連の「財閥転向」と呼ばれる方策を実施して行くことになる。その一環として社会公益への寄与が謳われ、その象徴として三井報恩会という財団が設立された。

米山梅吉はこの三井報恩会の初代理事長に就任することとなった。三井報恩会は三井合名からの寄付金3,000万円で昭和９年４月に設立され、学術・文化・社会事業・農漁村復興事業等へ多額の助成を行うことを目的とした。設立第一年目の昭和９年度の実績を見ると、直営ならびに助成事業で195万円余を支出している。同じ年の三井信託の純益が220万円であることを考えると、それがいかに巨額であったかわかるであろう。」と。

この財団基金3,000万円について、この財団設立に関わり、後に三井不動産株式会社の社長・会長になった江戸英雄氏は、平成６年に出版の著書『三井と歩んだ七十年』の中でこう言っています。

「当時の3,000万円といえば、今の時価に直せば800億～900億円になるし、その金利だけで当時120万円もあったのだから、相当なことができたわけだ。」と。

この計算だと当時の１万円は今の3,000万円と言うことになります。

また、この10年間に行った支援・助成等の対象事業の総件数は3,922件で、その為の総支出額は17,535,066円（１件当たり4,471円）と言う厖大な規模でした。

この間に行われた事績全体の概要については、筆者が平成18年４月の当館春季例祭で行った講演の「米山梅吉と三井報恩会」の記録が同年秋の館報に収録されています。また、本稿の最後の「付録」もご参照いただければと思います。

国民健康保険制度創設の経緯

我が国の健康保険制度は、大正11年（1922年）に制定された「健康保険法」に基づく、企業等で働く被雇用者のための事業所等を単位とする制度と、昭和13年（1938年）に制定された「国民健康保険法」に基づく、被雇用者以外の農漁村の人々や自営業の人々のための市町村等を単位とする制度の二本立てを基として、現在まで続いています。この二制度の他に「船員保険」「国家・地方公務員共済保険」新しくは「後期高齢者医療保険」等がありますが、制度の主軸は前記の二つの法律による制度と考えて良いと思います。そうして三井報恩会がその創設に関与したのは、この昭和13年の「国民保険法」制定のための支援でした。

①制度制定の背景

前記の坂本元理事長の文章の通り、昭和５年の昭和恐慌時以降、農村の窮乏は極めて深刻なものでした。

我が国の昭和４年の貿易での輸出総額は26億６千万円でしたが、翌５年には19億１千万円に、６年には15億１千万円に急減し、輸出総額の約40%を占めていた生糸や繭の価格は半分以下に急落し、当時全国の農家戸数は約560万戸で、その40%弱の220万戸が養蚕を副業としており、養蚕収入は出稼ぎによる収入と並んで、農家の最も大切な現金収入であったため、この恐慌による農家への打撃は痛烈なものでした。

さらに昭和５年は米は豊作で、価格は36%も急落し、かってない「豊作飢餓」と呼ばれます。この価格下落は他の農産物にも波及し、このため昭和４年までの過去５年間平均35億４千万円余であった農家収入は、昭和５年には18億８千万円にまで減少したとされています。

そうして翌６年は一転して冷害により東北・北海道を中心に米は大凶作となり、東北６県の収穫高は平年作の60%にとどまり、一戸当たりの農業所得で見ると、昭和４年の1,326円が６年には650円と半分以下となり、また、農家一戸当たり負債額は837円と家計費をはるかに上回る状態でした。

この様な農家の収支状況のもとで、家族に病人が出ると家計への負担・圧迫の悲惨さは言うまでもありません。さらに、この様な窮乏した農村には医者の来手は望むべくもなく、昭和10年当時約１万２千の市町村の内、約３分の１が無医村で、同じく３分の１が開業医１人しかいない町村でした。この状況は結果としても農村の治療費の相対的な高さを招き、農林省の調査では、当時の農家一戸当たり平均医療費は20～25円程度でしたが、問題は平均値ではなく一旦病人を抱えると、一時に多額の出費になることでした。このため借金をして挙句の果てに田畑を売り、一家離散をすることも少なくなかったのです。

当時の農村に多い病気はトラホーム・寄生虫病と結核が代表的なもので、農漁村部の医療対策は国全体にとって大きな社会問題でした。

このため政府は「時局医療事業」として出張診断や巡回診療を行ったり、恩賜財団済生会やその他の民間社会事業団体による施療事業なども行われました。町村によっては、診療所を設けたり医師の招へいも行ったりしています。また、住民自身が資金を出し合って互助組合をつくり、組合員の医療費負担に備えるところもありました。

なお、古くは江戸時代から、不時の出費にそなえるため米や現金を持ち寄ってつくる組合が、「頼母子講」「無尽」あるいは「定礼」という名で設けられていて、福岡県の宗像郡や鞍手郡・熊本県の天草郡など全国各地に村落単位で存在していることが、行政や医療関係者の間では知られていたようです。

②制度実行のための実験試行

以上の様な状況のなかで、この問題を所管する当時の行政機関の内務省社会局は、昭和８年ころから、すでに行われていた「健康保険法」に倣って、農漁村の人々を対象とする保険制度の研究にとりかかりました。そうして、翌９年に市町村の区域ごとに組合をつくり、組合が保険者となって保険事業を行う案で「国民健康保険制度要綱素案」を発表しました。この案には国民一般の各方面から非常な関心が寄せられます。

県や市町村の長と世論はおおむね皆賛成で、早期実現の要望が強く出されました。これに対してこの制度に一番関係の深い各地の医師会は、一律の低い診療報酬を強いられ、医療内容の低下を招き、組合直轄の診療所等が作られ、限られた嘱託医に患者がとられ、一般開業医制度が侵されかねないと強い警戒姿勢を持ちました。

薬剤師会では、当時すでに「医薬分業」を主張していた立場から賛成意見が強かったのですが、「富山の薬」で代表される配置売薬業者は、農漁村が最大の需要先であったため、強い反対を唱えました。

また国の財政を所管する大蔵省は、軍事予算拡大の状況下、国民の大部分が対象と成り得る新制度への国庫負担増加を懸念し概して消極的でした。

そこで、内務省はこれらの懸念に応えるために、要綱案に基づいて、いくつかの町村で試験的に実施することとして、埼玉県越ヶ谷町・山形県角川村・愛知県一宮村等全国で12の「国民健康保険類似組合（モデル）」をつくり実施実験をおこなうこととしました。三井報恩会の支援は、この試験組合運営の費用を負担することだったのです。

この試験結果は、期待した通りほぼ成功を収め、その結果をふまえて、昭和10年に最終的な要綱案を作成して、「社会保険制度調査会」に諮り、その後若干の紆余曲折がありましたが、13年４月１日法律第60号として「国民健康保険法」は公布されました。

この法律の骨子をまとめると次のようなものでした。

1、国民健康保険は相扶共済の精神により疾病、負傷、分娩または死亡に関し、保険給付を行うことを目的とする。
2、保険者は国民健康保険組合（以下「組合」という）とする。
3、組合は任意設立の普通組合と特別組合の二種類とする。
4、普通組合は市町村の区域を単位に、その区域に住む世帯主を任意加入の組合員として設立する。
5、特別組合は同一の事業所または同種の業務に従事する者を任意加入の組合員として設立する。
6、被保険者は組合員とその世帯員とする。
7、保険給付は疾病、負傷の療養の給付、分娩の助産の給付、死亡の葬祭とす。
8、組合員より保険料を徴する。療養給付について一部負担金を徴す。
9、国、道府県と市町村は組合に対し補助金を交付する。

③越ヶ谷町「順正会」での試行

筆者が、この越ヶ谷順正会が国民健康保険類似組合として試行に加わったことを知ったのは10数年前ですが、それは越ヶ谷市が、たまたま住んでいる川口市に隣接していることと、現在同市が「国民健康保険発祥の地」と宣言し、市庁舎の前庭に国民健康保険法の主旨として使われた言葉「相扶共済」の記念碑があることからでした。

国民健康保険発祥の地の碑
（著者によるスケッチ）

そうして、三井報恩会の、この「実験試行への支援」とが重なり、越ヶ谷順正会が何故この時に全国の中から選ばれてモデルになったのかを調べて見よう、という気持ちを起こさせたのでした。

そこで以下にこのことについて書いて見ます。

越ヶ谷の地は、古くは元荒川や古利根川水系の水運の要地で、江戸時代は旧奥州街道・日光街道の江戸から三番目の宿場町として栄えて来ました。昭和初期には人口約8,000人の半農半商の埼玉県南東部の中核的な町となっていました。そうして、昭和恐慌はこの地にも例外でなく、さらに当町固有の問題も加わって、町税滞納が多発し、町財政は急速に逼迫しました。このため、その対策として、昭和10年に納税組合を組成して、また、組合員間の相互扶助のための「至誠会」という無尽会を設立しました。一方では、伝染病費が町財政を圧迫し、罹病家庭に困窮をもたらしている実態を知り、納税組合を母体とする地元住民への無料奉仕を主な目的とする共済制度を計画し、町が某医師から寄附されていた診療施設を、無尽によって積み立てられた資金で譲り受けて医療事業を開始しようと計画しました。これに対して地元医師会は強く反対し、さらに、今では想像しにくいことですが、警察いわゆる公安筋も、納税組合が法人格を持っていないことなどを理由として、これを認めようとしませんでした。当時の警察は、共産主義・社会主義を認めない立場から、一定の目的のもとに組合等の団体を創り、社会一般に働きかけることに厳しい目を向けていました。この医療事業共済の動きもこの種のものと疑問視していたのだと思われます。当時警察に反対されたことは、この計画がほぼ絶望と見られるほどのことでした。

ただここで納税組合にとって極めて幸運だったことは、前記の内務省社会保険局による保険制度創設の研究が、丁度この時期に進んでいて、その要綱素案発表の段階にあったことです。そうして、同局による幾度かの視察の後、越ヶ谷の計画が全国の12の国民健康保険類似組合（モデル）のうちの代表的なものとして取り上げられ、昭和11年２月に「越ヶ谷順正会」の名で発足したのでした。ただし、この時内務省にも実験組合のための十分な予算がありませんでした。

この辺りの様子を知るために、昭和29年に国民健康保険制度発足15周年を記念して出版された『埼玉県国民健康保険史』に、当時の社会保険局保健部長であった川西実三氏が寄稿した文章の一部を以下に写してみます。

「大蔵当局は非常時局の財政難と将来の国庫負担の莫大なるべきを恐れてこの制度を認めまいとする。これに対して何らかの方法で実現の可能性のあることをしめさねばならぬ。これが出来れば世論が湧いて大蔵当局も動くであろう。そこで私は密かに時の社会局長官半井清氏と相談して、少なくとも年額一万円を生保協会か三井報恩会に頼んで十か所ばかりの国保組合のモデルを作ろうと計画した。昭和10年９月18日雨を冒して長官と二人報恩会を訪問、米山理事長山口常務理事その他幹部揃われた所に出て案の内容を説明、経済的援助を要請した。10月２日山口氏より快諾、直ちに着手され然るべし、国家がとりあげるまで報恩会は毎年一万円の出捐をすべし。ただし雛形はやり易い所だけにせず、且つ多種多様なるべきことという希望がつけられた。」

これを読むと、要請を受けてから回答をする間わずか２週間で、その迅速さが注目されます。それと、実験を客観的で公平なものにしようと願う「ただし」以下の希望条件はいかにも米山さんらしい、いきとどいたものを感じさせます。

この時期三井報恩会は、米山理事長・山口安憲常務理事のほかに参事・主事・書記とされる職員が22名、それと雇員・傭員とされる職員15名の計37名で構成されていました。この体制で全国各地から寄せられる大小多種多様な要望に応えて、10年間で4,000件弱の厖大な数の対象を支援したのでした。実務は、米山さんのリーダーシップの下で山口常務理事と若干の参事との合議による速断速決で行われたものと考えられます。

この前後の米山さんは、大正13年に政府経済会議議員、同15年に政府金融制度調査会委員、昭和５年に産業調査会評議員信託業代表、同11年に法律審議会委員、そうして、昭和13年には貴族院議員と、立法・行政各方面に精通する立場に居りましたから、この「国民健康保険法」立法の動きも勿論十分ご存知だったと思います。さらに、三井報恩会が行った農漁村振興の多種の支援から考え、当時の農村の窮状については現在の我々が想像も出来ない詳細な情報を持っていて、その支援策に心を砕いていたと考えられます。ですから、この様な「速断速決」が出来たのでしょう。

三井報恩会の「事業報告」の記録から

三井報恩会は昭和９年４月５日の財団法人設立登記完了から、昭和20年８月のあの敗戦で実質的にその事業を中断するまでの間、毎年「事業報告」を作成し公表しました。それはＡ５版で各年100頁ほどの詳細な内容のものです。その中から、この「国民健康保険」についての部分の主なところを書き出してみます。

昭和11年度事業報告から

「農村を対象とする医療問題については、政府の計画せる国民健康保険組合の実施に至る前提として、先に本会は内務省社会局と協議し現に全国中5県9ヶ所の同種組合の組織経営を助成し、その健全なる経営発達を期待しつつあり。」

昭和12年度事業報告から

「本年度においても全国中５県12ヶ所の同種組合のために、その経費9,980円を助成せり。幸いに第七十三帝国議会において国民健康保険法の成立を見、昭和13年７月１日より実施せらるることとなり、ここに本助成の目的は達せらるるに至れり。」

昭和13年度事業報告から

「昭和11年度以降助成し来れるが国民健康保険法実施せられ、本助成の目的は達成せられたるが、実施期間に至るまで本年度経費として11組合に対し金4,250円を助成せり。」

以上の３年度間の助成内訳を対象別に列挙すると次の通りです。

	昭和11年度	昭和12年度	昭和13年度
埼玉県			
越ヶ谷順正会	1,370	1,900	1,600
県庁員共済会	240	250	210
愛知県			
形埜村隣保組合	960	880	370
一宮村　同上	1,230	1,000	420
大森　　同上	880	710	280
藤岡村　同上	1,450	1,400	300
岐阜県			
大湫村済生会	520	250	100
山形県			
角川村保険組合	930	630	220
熊本県			
八幡村保険組合	720	560	250
中　村　同上		500	250
河内村　同上		1,500	
城山村　同上		400	250
合　計	8,300	9,980	4,250

むすびとして

この国民健康保険制度創設は、昭和初期の社会情勢を背景に、必然的に社会的要請として進められたものと言えます。従って、たとえあの時三井報恩会の助成と言うことが行われなかったとしても、時を得て実現したことでしょう。

しかし、あの時の制度創設に尽力した多くの人達の情熱と、三井報恩会の出捐がなければその実現は大きく遅れ、あの後すぐに到来した戦時体制への移行を考えると、あのタイミングは日本の健康保険制度にとって絶妙なものだったと言えます。先進国と言われる諸国にあっても未だに「国民皆保険」を実現できていない国もあるなかで、我が国が今から80年も前に国民皆保険への途についたこと、そのための先人達の尽力に畏敬の念を抱かざるを得ません。

最後に、三井報恩会がその活動期10年間に遺した「事業の内容と規模」を私なりに整理しまとめたものを付録します。

①全体の規模				
事業総計	3,922件	17,535,066円	１件当たり	4,471円
内社会事業	3,454件	11,419,760円	１件当たり	3,306円
文化事業	468件	6,115,306円	１件当たり	13,067円

②社会事業の内訳		
ハンセン病療養所新設	2,656,000円	3,575病床増設
ガン治療ラジウム購入	999,695円	癌研へ５グラムとその設備
結核化学療法研究	1,363,600円	新薬セファランチンの研究
結核療養所新設拡充	1,036,400円	60の新増設5,000床増設
各種診療機関拡充	970,000円	27の済生会病院新設等
医療部門中計	7,025,695円	
恩賜財団愛育研究所助成	400,000円	麻布病院への寄付
隣保事業助成	395,000円	隣保会館106か所の新設
その他の社会事業	3,599,065円	児童養護・老人養護・失業対策等 国民健康保険実験組合助成
社会事業合計	11,419,760円	

③文化事業の内訳		
めん羊貸付増殖奨励	867,628円	5,250頭輸入105町村に貸付
農村振興更生事業	881,724円	青森県西平内村・岩手彦部村等
農村工業施設助成	412,594円	農水産物加工場93か所新設等
農村人物養成施設	453,963円	埼玉与野「農民講道館」等10か所
農村部門中計	2,615,909円	
社会教育・健民活動	674,900円	青少年団・体育向上事業助成
満蒙・南洋開拓助成	527,000円	開拓指導者養成機関支援等
学術研究・実験助成	2,052,200円	放射能・石炭油化・合成繊維等多種
その他文化事業	245,297円	化学博物館・富士山測候所等維持
文化事業合計	6,115,306円	

本稿のための参考資料
三井報恩会編　『年次　事業報告』昭和９年度から昭和13年度分まで
坂本豊美編『米山梅吉先生語録抄』平成14年版（財）米山梅吉記念館発行
江戸英雄著『三井と歩んだ七十年』平成６年発行　朝日文庫
谷内宏文著『点描　米山梅吉』平成17年発行　新風舎文庫
埼玉県国民健康保険連合会編『埼玉県国民健康保険史』昭和29年発行
吉原健二・和田　勝著『日本医療保険史』平成11年発行　東洋経済新報社

米山梅吉と５人の群像

―青年期の思想形成に影響を与えた人々―

前ロータリー米山記念奨学会　専務理事・事務局長
宮 崎 幸 雄（東京ＲＣ）

【はじめに】

中国・韓国・台湾で開かれる米山記念奨学会・学友会の会合に行きますと必ず「私たちはロータリアンと交流して、米山梅吉の精神を学んだ」と云う言葉を耳にします。他方、今日の急激なグローバリゼーションは、国境なき経済秩序と拝金主義的社会を創り出し固有の伝統文化・価値観をもグローバル〈米国化〉にしていく洋魂洋才の時代の到来とも云われます。私たちはもう一度日本のロータリーの和魂洋才の奉仕観と、米山梅吉の平和日本の願いから始められた米山奨学金の精神に立ち帰り、この奨学事業の存在の意味と使命を見出すことが必要でないかと思うのです。

学友が学んだ米山梅吉の精神とは、米山が日本に紹介をしたロータリーの奉仕であります。しかしそれは決して西洋の奉仕の概念、理念を輸入し翻訳したものではありませんでした。少年期に漢学・儒学の師に出会い東洋の思想を学び、20歳で米国に留学してキリスト教文化・価値観に触れ、それを日本の伝統文化・精神風土の中に融合させた和魂洋才の日本のロータリーの奉仕観を創り出したのであります。

1969年、静岡県駿東郡長泉町に米山梅吉記念館が開館した当時、２階の展示室入口に「米山梅吉と五人の群像」が掲げられていました。米山梅吉が青年期に思想的影響を受けた人々の群像でした。その５人とは、江原素六、藤田四郎、本多庸一、勝　海舟、メリマン・コルバート・ハリスです。この群像の内、藤田四郎を除く４名の共通点は、キリスト教に転向・入信し、キリスト教文化に触れ自由主義思想を持って日本の近代化に貢献した人々であります。註１

註１：記念館で見た“５人の群像”の共通点は何か？・・素朴な疑問が私がこの拙稿を書く動機となりました。文中米山梅吉翁および他の登場人物の敬称を略しました。

江原　素六（1842－1922）

米山梅吉14歳の時（明治14年）、旧幕臣の学者たちが教えていた沼津兵学校の後身沼津中学校に入ります。そこは、静岡徳川藩の幕府時代に西洋文学・洋学の大集成と云われる名門校で、その時の校長が江原素六でした。教授陣には、米山が生涯を通して大きな誇りを持ち尊敬していた勝　海舟・西　周・山岡　鉄舟などが教鞭をとっていました。

江原は幕臣の家に生まれ、神道教導職でありながら、英語教師の宣教師ミーチャムより洗礼を受けてキリスト教に転向し、自由民権論者として衆議院に当選し、政治家として活躍する一方、東洋英和、麻布中学校（現在の麻布学園）を創設した日本の私立学校の父と云われました。註２

江原は、成績が飛びぬけてよく、目の輝きがすばらしい米山少年に大きな期待を持っていました。当時米山は、「梅馨」の雅号で少年雑誌「頴才新誌」に投稿、夏目漱石（金之助）と並んで最多記録を持つ文学青年でありました。

註２：川又一英著『麻布中学と江原素六』新潮新書

藤田　四郎（1861－1934）

16才の時、米山少年はこのままここに埋もれてしまうことに満足できず、沼津中学を中退して東京に出ることを決心します。夜半、家人に告げずひそかに家を出ます。箱根路を越えて東京に出て銀座・江南学校に入学し、翌年、漢学者・土居光華の門下に入り漢学・儒学を学びます。そこで生涯の友人となる藤田四郎と出会い親交を深めます。

藤田四郎は米山梅吉より７歳年上。明治18年東京大学法学部を卒業して外務省に入り、明治28年米山が帰国した頃は、オーストリア、ドイツの大使館勤務を終えて農林省の農政局長の要職に就いていました。藤田の岳父は当時、財界の大御所井上 馨侯でした。後に藤田は貴族院議員になり井上 馨の口添えで米山を三井銀行の益田孝氏と中上川彦次郎氏に引き合わせ、合名会社三井銀行へ入行を薦め、米山梅吉を実業家に仕立てた影の立役者でありました。

本多　庸一（1849－1912）

米山梅吉の「国士本多庸一先生」の講演記録に“中学時代に自由民権運動の演説会での本多庸一の代議政体論は群を抜き名望著しきものであった。当時一少年の私（梅吉）如きも憧憬の的とした事であった。”と記し更に「国士論」では“国士のいかなる人格なるかを知らんと欲せば、先生（本多庸一）を仰げば足る」と述べています。註３

「米山梅吉研究」註４の第一人者で、畏友谷内宏文氏によりますと、米山少年は東京に出て“生涯で最も影響を受けた人、本多庸一（青山学院第２代院長）“と会いますが、上述の記述で、米山は少年期にすでに本多の人間的影響をうけている事が伺い知れます。

本多庸一は津軽藩の侍の家に生まれ、維新動乱の中で青年期を送り、朱学より陽明学に転じ、近代西欧思想に触れてキリスト教に入信します。明治７年、米国宣教師イング牧師を伴い弘前市に帰り、「東奥義塾」の塾長としてキリスト教教育と経営に当たり著名なメソジスト教会の教職者を輩出しました。明治21年、渡米してサンフランシスコにあるメソジスト教会の宿泊施設「福音館」に泊まり、政治家になるか宗教家を続けるか二者択一に苦悩しますがキリスト教の伝道者となる決意をしました。

時を同じくして、20歳になった米山も留学を決意して渡米し「福音館」に止宿します。そこは、日本から移住又は留学の夢をいだいて渡米した青年達が暫くの期間、塾生活をしてアメリカでの生活の準備をする場所でした。ここで米山は先に来ていた本多庸一と短期間ですが生活を共にします。

〈エピソード〉

「福音館」では毎夜、本多を囲んで若者たちの熱心な議論が続きます。ある夜、日本製の長火鉢を囲んで熱弁をふるう米山の話を聞きながら本多庸一が手に持つ火箸で火鉢の灰に「巧遅拙速」（仕事の出来は早くてまずいより、遅くて良い方がいい）の四文字を書きます。これを見た米山は、本多庸一の鋭い洞察力に対して畏敬の念を深くし“生涯で最も影響を受けた時だ”とその思い出を語っています。後にこれを座右の銘にします。

本多庸一と米山梅吉との交友関係は帰国後も続きます。意気がピッタリと合う友と人生を語り、キリスト教信徒から実業人になった経緯を明らかにしたと伝記に記されていますが、キリスト教について両者は考えを異にしていたと思われます。

註３：岡田哲蔵著『本多庸一伝』日獨書院
　　青森北東ロータリークラブ編『米山梅吉翁と四人の青森県人』本多庸一

註４：谷内宏文著『点描　米山梅吉　日本ロータリークラブと信託業の創始者』
　　著者は川口ＲＣ会員、元三井信託銀行代表取締役副社長、元（財）ロータリー米山記念奨学会監事

勝　海舟（1823－1899）

米山は、明治28年(1895年)28才で米国における８年間の留学生活を終えて帰国しました。ジャーナリストを志していましたが福沢諭吉に会って変身。かねてより米山は、沼津中学時代より尊敬していた人で、「江戸城無血開城」の偉業を成し遂げた勝 海舟に師事したいと願っていました。同師が維新改革期にキリスト教に転向した事も遠因にあったと思はれます。

ある日、友人の望月小太郎から紹介状をもらって病床の勝 海舟を訪ねました。その時、海舟に「みんな出世して偉くなると来なくなるよ、お前も今に偉くなったら来ないのだろう。その時分おれは死んでいるからよい」と云われましたが、その後足しげく病床を訪ねて幕末の歴史を学び、後に東京博文館より『提督ペリー』を出版します。題字は勝 海舟の筆によるもので、長編で英訳された話題作でした。

〈エピソード〉

合名会社三井銀行に入社して３年後、31歳で神戸支店次席となりました。ある日、欧米銀行業務視察を命じる手紙を受け取りますが同時にもう１通の手紙が届いていました。それは大臣秘書官に採用するからすぐ上京せよとの手紙でした。推薦者は勝 海舟。当時、30歳を超えたばかりで大臣秘書官は破格の立身出世でした。二つの手紙を前にして一夜眠れぬ夜を明かしました。しかし、決断は三井銀行に残ることでした。

決断の理由に「調子づいてはならぬ」と幼い時に母に教えられた家風を思い出したことと、人生の大岐路の時に出会った人々、とくに友人の藤田四郎、井上馨の恩を裏切ることをしてはならないと冷静に判断をしたからだと語っています。註５

註５：佐々木　邦著『米山梅吉伝　創意と奉仕の一生』財団法人得愛会版（非売品）

メリマン・コルバート・ハリス

（Merriman Colbert Harris 1846―1921）

メリマン.C.ハリスは、明治６年、日本のキリスト教解禁・禁教高札の撤去直後に来日した米国メソジスト監督教会の宣教師で「アメリカ生まれの日本人」と自らの生涯を米国移民の日本人子弟の教育や日本人排斥の反対運動に捧げた人で、その功績により日本政府より勲二等を綬せれた知日派の宣教師でした。また、日本のキリスト教伝道の先駆者、新渡戸稲造・宮部金吾・内村鑑三らに洗礼を授けた宣教師として日本のキリスト教伝道の歴史にその名を残しています。

明治21年米国に帰国している時、サンフランシスコの「福音館」で米山梅吉と本多庸一に出会います。ハリスは米山に出会ってキリスト教の伝道者に育てたいと思いオハイオ州ウエスレアン大学に入学させます。大学で哲学を専攻することをすすめたのもそのような思いがあったからです。米山は帰国前に米国同胞教会註８に関係し、明治28年３名の日本人宣教師（入江錦五郎・土井操吉・米山梅吉）の一人として帰国したと同胞教会教会史（昭和38年10月27日発行・教会史編集員会編）に名前が記されています。註６米山は、福音館に止宿当時、リバイバル運動の高まる中でハリス監督から洗礼を受けたと察しられますが、キリスト教徒としての信仰生活について余り語っていません。帰国後、母校青山学院で教鞭をとることを薦められますが“私は酒も飲みタバコをたしなむ世俗の人”と云って断ります。キリストの信仰を負担に感じていたと思われます。

大正10年９月、信仰の恩師M.C.ハリス監督の死を訪英の船中で知らされます。その悲しみを「外国の聖やまとの土に帰るその足跡を踏むべし我等」と歌に詠み監督の死を悼みました。

〈エピローグ〉

サンフランシスコでの本多庸一、ハリスとの出会いから帰国後、母校青山学院（東京英和学校の後身）との連絡を保ちます。昭和９年、67歳で三井信託株式会社社長を辞任し、財団法人三井報恩会理事長となり全国のハンセン病、福祉施設の支援協力や関東大震災募金活動にボランティアとして東奔西走しました。また、青山学院募金委員長を引き受け、校友会最高額の浄財の寄付をし、緑岡小学校（青山学院初等科の前身）と幼稚園の設立を実現しました。同時に、自身は小学校校長を務め、春子夫人は園長として子弟の教育に情熱を燃やした「ロータリー奉仕の人」に相応しい生涯を送りましました。註６

内助の功の大きかった春子夫人と二人のお嬢さんは、いずれも洗礼を受けてカトリックの信者となり春子夫人は昭和30年３月31日、カトリック信者マリア・エリザベートとして昇天されました。享年81歳でした。註７

米山梅吉翁も最後の武士の子、神官の孫として「聖徳院殿梅園浄香居士」となったことには深い意味があると思われます。素封家の養子となり“日本の家”の重圧中で育てられ、維新動乱の中でキリスト教と出会います。米山も徳川時代の邪宗門観の偏見と闘いながらキリストの十字架を背負って生きた“隠れキリシタン”の一人であったのかも知れません。

註６：谷内宏文『点描・米山梅吉』Ｐ.292～Ｐ296

註７：佐々木　邦『米山梅吉伝』Ｐ.122

註８：藤代泰三　『キリスト教史・現代キリスト教シリーズ４』Ｐ437

【結び】

青年期に「板垣死すとも自由は死せず」に魂をゆり動かされ、自由民権・世界平和・自由主義思想をもって日本近代化に貢献した人々と出会い、米国に留学してオハイオ・ウエスレアン大学での哲学、ＮＹ・シラキュース大学で法律を学び、“流浪苦学”の生活を通して身につけた奉仕の体験。その奉仕観は西欧キリスト教の奉仕観であったが、青年期に学んだ漢学・儒学の知識（日本固有の精神風土）と西洋の学問知識を融合させた和魂洋才の奉仕観を日本に紹介し、ロータリークラブを設立して、「各人の職業を通して社会に奉仕する“奉仕の理想”」の礎をつくりあげた一生であったと思うのです。

豊岡ロータリークラブ創立 60 周年記念

米山梅吉記念館視察の旅

川端　強（豊岡ＲＣ 会長）

本年度当クラブは創立60周年を迎え、「“To dream a new dream”きらめく夢（みらい）に向かって」をテーマとして、創立60周年を豊岡ロータリークラブの還暦と捉え、記念事業の１つとして、日本ロータリーの原点、哲学を見つめ、これから自身のロータリー人生を深く考える機会をつくることを目的に、10月７～８日に米山梅吉記念館の視察旅行を行う事となりました。

参加者は総勢24名で、10月7日の朝、午前7時15分に豊岡駅に集合し、米山記念館に到着したのは午後１時40分でした。

そこで全体の記念写真を撮影後、午後２時より豊岡ロータリークラブ創立60周年記念特別例会を始めました。

私の点鐘にて例会はスタートし、長谷川豊記念事業部会長の開会挨拶の後、ロータリーソング「奉仕の理想」を合唱し、私をはじめ、会員全員が「日本のロータリアンの聖地」を訪れた感動に胸を膨らませました。

私の挨拶では、休日にもかかわらず無理を言って例会を開かせて頂いたことへの感謝の意を述べた後、この記念事業の意味を話し、内藤成雄氏の『藍壷先生という人・米山梅吉物語』を読んでの私の思いを述べさせていただきました。

米山梅吉記念館の渡邉脩助理事長から来訪への感謝の辞と米山梅吉記念館の歴史と現状についての説明があり、「米山梅吉記念館はロータリーが所有する唯一の建物です。有効に活用し、米山精神、ロータリー精神を学んでください」との言葉を頂きました。

バナーの交換に続いて、麻生会員によるスピーチがありました。麻生会員は、2009年に開催された米山梅吉記念館創立40周年記念式典に出席され、その時の感動、そして先輩ロータリアンから、優れたロータリアンなる径は、米山先生の人格をそのまま取り入れることだと教えられたことを確信できたことなどを話されました。

その後、藤原紘道創立60周年実行委員会委員長が謝辞を述べ、全員で「手に手つないで」を高らかに歌い、後進にロータリアンの生き方を示された米山梅吉翁への感謝の意を捧げ、ロータリアンとしての決意を新たにしました。

例会終了後、２階の展示室を事務局員の案内にて見学し、米山梅吉翁の業績を紹介するパネル、資料、書籍、墨跡などを通じて、国際奉仕の道に生涯邁進した先人の遺徳を偲びました。当日は残念ながら曇で富士山は見る事ができませんでしたが、日本のロータリーの歴史を再認識でき、充実した一日を過ごすことができました。

１日目は伊豆長岡温泉にて宿泊し、温泉で疲れを取り、夜の懇親会にてクラブの親睦を深めました。翌日の朝は晴天でホテルから綺麗な富士山を見る事ができました。

２日目は、朝８時45分にホテルを出発し沼津を訪れ、沼津御用邸記念公園、沼津港の日本最大級の可動式水門「びゅうお」、沼津魚市場街を見学し日本海側の豊岡市とは趣を変え、異彩を放つまちづくりや防災のあり方などについて知見を深めました。

最後に米山梅吉翁の母の実家である三島大社を参拝して、帰途につきました。豊岡に着いたのは午後８時でした。

この視察旅行を通じて参加した各会員それぞれが、ロータリーの原点を見つめ直し、これからのロータリー人生を送る上で、大きな糧になったのではないかと思いますし、会員が一夜を共にすることで、普段にない親睦の場になったのではないかと思います。

このような機会を、まだ米山梅吉記念館に来られていない各地区のロータリークラブの皆様にも、是非体験していただきたいと思います。

最後になりましたが、休日にもかかわらず例会に参加していただきお世話になった米山梅吉記念館理事長渡邉脩助様、事務局長木内昭夫様、事務局員様に感謝いたします。

米山梅吉記念館春季例祭

お知らせ

日　時　平成25年4月27日（土）　午後２時～

場　所　米山梅吉記念館ホール
　新幹線三島駅よりタクシー５分

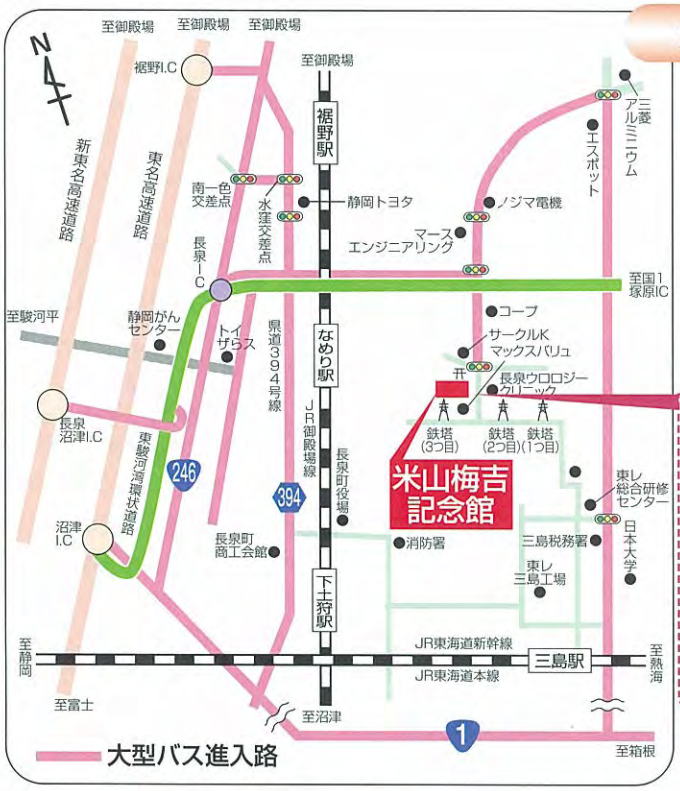
内　容　例　祭

講　演　〔講師〕弦間　明 氏（東京ＲＣ　㈱資生堂社長）
　〔演題〕「資生堂の社会貢献と東京ロータリークラブの職業奉仕」

アトラクション
　ソプラノ　中村　香織 氏（ロータリー財団山静学友会メンバー）
　ピ ア ノ　廣瀬　美鈴 氏（ロータリー財団山静学友会メンバー）

懇親会　講演者、参加者ご一緒に懇談　登録料無料

多くの皆様のご来館をお待ち申し上げております。



米山梅吉記念館のご案内

● 開館時間 ●

午前10時～午後４時

● 休 館 日 ●

- 月曜日
- 12月28日～１月４日
- 整理のための休館日
（５月・８月の特定日）

米山記念館及び館報へのご意見、ご感想、寄稿等お寄せ下さい。

米山梅吉記念館 館報

Vol. 21

発行日　平成25年３月10日
発行者　公益財団法人 米山梅吉記念館　　理事長　渡邉脩助
〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1
TEL（055）986-2946 FAX（055）989-5101
URL : http://yoneyama-umekichi.jp/
e-mail : yumh@ai.tnc.ne.jp
印　刷　フタバ印刷株式会社